



怪我とバッシング

半年前のことである。日比谷公園に行く途中、孫が「おんぶ！」というので、Dバックを前にして孫を背負い歩き出した。少し歩くと螺旋階段が目にとまり、「どれ、見てみようか」と三段しかない階段を上がろうとした時、一段目の下にあった僅かな段差で転倒した。咄嗟に片手をついたが、孫は投げ出される形になった。孫は手から着地して無傷であったのには安心した。

私は膝を階段の角に強打したが難なく立ち上がったので、何事もなかったように公園前の横断歩道を渡り始めた。が、歩くたびにズボンが赤くなっていき、地下道に入り込んで、膝を見ると裂傷である。その時、頭上から「大丈夫ですか？」と警官の声。派出所に連行？され、応急措置をしてもらい、「縫わないとだめだな」と救急車が手配された。親切、適切ではあったが、救急車到着まで、喧嘩？事件？等々職務質問されたのには閉口した。

そして順天堂大学医院へ。救急受入れの長い椅子の様な台で、消毒、診察後に車椅子でレントゲン室に。帰りにトイレをお願いしたら、美人看護婦さんも入ってきたのには驚いた。「向こうを向いていますから」と言われ、爺は爺らしく割り切って一物を…となった次第。落ち着きのない老後の予行練習をしてしまった。

長椅子に戻り暫くして「骨には異常ないので、局部麻酔をして縫いましょう！」と、手術台ではなく、その場で、消毒、麻酔と手際よく、あっという間の4針で、麻酔が一部痛かったくらいであった。

10日くらいたってから抜糸と言われたので、地元の総合病院へ行ったが、研修医のような若造に当たり、「かさぶたがあるのでよく見えないなあ」とか言いつつ数カ所ハサミを入れて糸を取り出した。しかし最後に「全部取り切れていないかもしれないので、残っていたら自分で取ってください」というのには驚いた。そして数日後。瘡蓋が剥がれるときに黒糸の端が少し頭を出すので、ピンセットで引っ張ると、スルリと1cm強の糸が取れた。また数日後には1cm弱の糸が取れた。結局3回自分で取った。医者には間違いはなかったわけだ。

今回の怪我で、年を取ると新陳代謝が悪くなり、今も傷跡が紫色のままであることも身に染みた。そして、転ばぬ先の杖ではないが、何事も足元はしっかりと見ないといけないことを痛感した。加えて、女房の怖さである。「あなたは自業自得だからいいけど、孫が怪我したらどうするの？」等々袋叩きにあったが、もっともである。

反面、皆に助けられ、一人じゃ生きられないと改めて実感し、感謝の気持ちを忘れてはいけないことも刻み込まれた。なお、怪我をした3月9日は「感謝の日」として日本記念日協会に登録されている。

(麻賀倫太郎)